

【背景】

腎クリニックとして開院後 2 年が経過し、透析患者が 90 名を越した。また 70 歳以上の高齢者が半数を占め、糖尿病患者が全体の 45% に至りフットケアの必要性を痛感した。

【目的】

フットケア導入に向けて、患者のフットケアに対する意識や現状を把握し実施する。

【対象】

当院外来維持透析患者 91 名。男性 50 名、女性 41 名。平均年齢 69.7 ± 11 歳。平均透析歴 5.2 ± 7.3 年。

【方法】

質問紙法を用いて 28 項目を調査し、聞き取り及び観察も行う。その際フットケアに関するパンフレットを渡し説明も行う。

【結果 1】

アンケート結果を Fig.1 に示す。

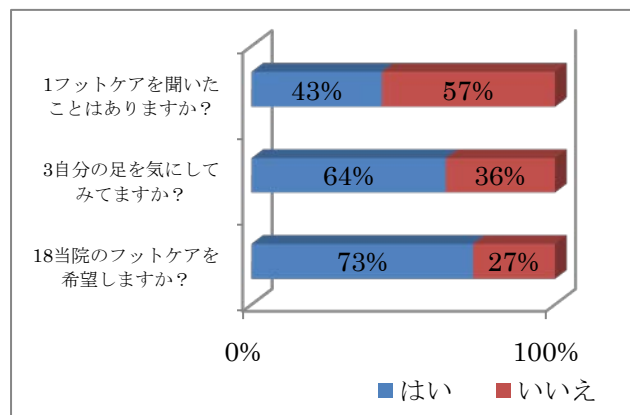


Fig.1 フットケアアンケート結果①

Fig.1 より、当院の患者の約 6 割がフットケアを認識していないことがわかった。しかし半数以上が認識していないが、自分の足を気にしてみていることがわかる。また 7 割以上がフットケアの説明後に当院でのフットケアを希望していた。

【結果 2】

「フットケアを聞いたことはありますか？」の質問に対し、「はい」「いいえ」それぞれについてまとめたグラフを Fig.2 に示す。

フットケアを聞いたことはありますか？

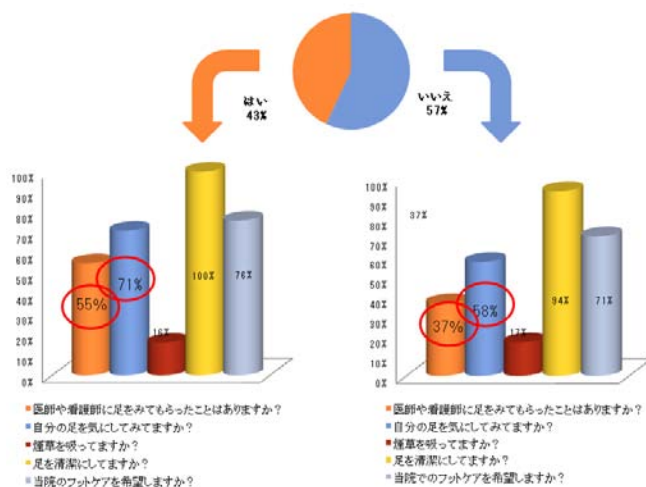


Fig.2 フットケアアンケート結果②

Fig.2 より、「医師や看護師に足を見てもらったことはありますか？」の質問をみると、フットケアを認識している方が多く診てもらっていることがわかる。またフットケアを認識している人ほど、自分の足を気にする傾向があった。

【結果 3】

- ・S.T氏 76歳 男性 透析歴1年 糖尿病性腎症 認知症
- ・嫁がキーパーソン、家族とは主に連絡帳を活用し情報交換
- ・ABI (R)0.69/(L)0.70 SPP (R)31/(L)15mmHg
- ・H22年12月中旬左第2趾抜爪、一部黒色化→当院で生食洗浄、ガーゼ保護→皮膚科、血管外科受診勧め→家族の都合→速やかな受診困難
- ・H23年1月下旬 S病院末梢血管外科受診→2月PTA施行

Table1 症例①の詳細

アンケート後 S.T 氏より、「爪がはがれた」と訴えあり、足を診たところ左第 2 趾抜爪し、一部黒色化していた。皮膚科、血管外科の受診を家族に依頼するも、家族の都合により速やかな受診が出来ず、透析毎に洗浄処置で対応していた。しかし悪化傾向がみられ再度家族へ働きかけ、S 病院末梢血管外科受診し、PTA 施行となった（経過を Table1 に示す）。

PTA 処置前の足の状態(左第 2 趾抜爪、一部黒色化)を Fig3 に示す。



Fig. 3 症例1の処置前

【結果4】

- M. S氏 62歳 男性 透析歴18年 慢性糸球体腎炎
- 両下肢閉塞性動脈硬化症、右浅大腿動脈完全閉塞、T大学病院にて定期受診
- ABI (R) 0.69 / (L) 0.55 H22年10月よりHD後ASケア開始
- H22年11月中旬左第4趾亀裂→11月下旬潰瘍形成、ASケア中止  
→T大学病院皮膚科受診→外用療法で対応、PGE<sub>1</sub>、スタチン投与開始
- H22年12月SPP (R) 31・(L) 30mmHg→T大学病院血管外科受診  
→外科的手術は困難との見解
- H23年1月中旬LDL吸着1回/W 非透析日開始
- 2月初旬よりASケア再開

Table2 症例②の詳細

今回のアンケートを機にフットケアの認識が高まったことでM. S氏より「足を診て欲しい、ひび割れが痛い」と訴えがあった。(この患者の経過をTable2に示す) 足を確認すると左第4趾の亀裂を認めた。更に確認した1週間後潰瘍が形成され (Fig. 4)。かかりつけのT大学病院の皮膚科を受診し、外用処置、保湿ケアを自宅・当院・皮膚科で継続した。更に1月よりLDL吸着も開始し、潰瘍は改善された (Fig. 5)。



Fig. 4 症例②処置前



Fig. 5 症例②処置後

【考察・結語】

今回アンケートを実施し、患者自身が足の異常に気づき早い段階でスタッフに伝えるためには、患者自身や家族のフットケアの認識を高めることが重要であると考えます。そのため、スタッフの観察力、アセスメント能力の向上が必須である。また患者の生活背景を把握し、的確な情報を与えることがフットケアの認識へと繋がっていくと考える。そして患者と一緒に足をみて、自己実現できるセルフマネジメントの援助も行っていく必要がある。

症例2の潰瘍が改善した例のように、相談できる環境をつくることで、患者との信頼関係の構築をしていかなければならない。そのうえで患者、家族との連絡法を確立し、他の病院との情報を共有し治療を協力していくことが大切である。

今回のアンケートをきっかけに、家族や地域との連携が不可欠であり、それが救肢へと繋がると考える。